ありあけ

佐賀大学農学部
同窓会報
No.15

発行日　2015年１月１日　　発行　佐賀大学農学部同窓会
編　集　会報編集委員会　　住所　佐賀市本庄町１ 佐賀大学内

TEL 0952-23-1253　FAX 0952-25-5700
E-mail dosokai@ai.is.saga-u.ac.jp
ホームページ　http://dousou.saga-u.ac.jp/

ご挨拶　同窓会会員のネットワークを大切に

農学部長　渡　邉　啓　一

明けましておめでとうございます。

同窓会会員の皆様には、常日頃から、本学部・研究科の教育・研究の発展のために温かいご支援ご協力を賜わり、心からお礼申し上げますと共に、皆様のご多幸をお祈りいたします。昨年は金丸前会長が佐賀大学同窓会長に就任され、川副前副会長が会長に選任されました。今年も同窓会運営を何卒よろしくお願いいたします。

同窓会会員は､学部卒業生･大学院修了生の正会員、現役学生の準会員、現旧教員と現事務職員の賛助会員からなっています。これら全会員のネットワークの強化がこれからの大学の教育研究の発展に大いに役立つと共に、個々の卒業生の人生を豊かにすることに繋がるものと思います。その思いで、私は一昨年の学部長就任以来、在学生が同窓会に参加することを提案して参りました。幸い役員の方々からの賛同が得られ、昨年５月17日開催の同窓会で、初の在学生30人と卒業生の懇親会が実現しました。在学生と卒業生両方から大変好評で、学生達は身近な先輩方との和やかな話の中で実社会を知ることができ、自分のキャリア設計に大きな影響を受けた者もいました。11月26日には卒業生を講師としての農学部就職講座が終了後、在学生と卒業生のおでん交流会が開催されました。これからも、ますます会員間の相互交流が活発になることを期待しています。

平成27年は佐賀大学農学部設置60周年の年であり、佐賀大学の大きな節目の年でもあります。27年度は国立大学法人としての第２期中期目標・中期計画６年間の最終年度となり､｢国立大学法人評価｣と｢機関別認証評価｣を受けます。また、平成28年度から始まる第３期中期目標・中期計画を作成する年でもあります。昨年、文部科学省と意見交換を行いながら本学部の強み・特色を整理し、今後、本学部が果たす社会的役割の方向性を定めました（ミッションの再定義)。抜粋すると、地域と共に未来に向けて発展し続ける大学を目指して、農学教育研究機関として、地域産業の振興と社会の持続的発展に貢献できる創造性豊かな専門職業人を育成する役割を果たします。また、生物資源開発・利用の先導的研究実践により、高度な研究開発能力をそなえた専門職業人を育成する大学院教育を目指します。さらに、農業技術経営管理者を育成する教育プログラム（農業版MOT）や日中韓の国際的連携による人材育成などの実績を生かし、高度な専門技術と経営能力を有しグローバルに活躍できる農学系人材の育成を目指します。研究面では、我が国トップの遺伝資源の保存とゲノム研究を基盤とした新品種開発、機能性食品や化粧品の新素材開発、これらの国際的共同研究への展開など、生物資源科学研究の地域及び国際的拠点となる研究を推進します。さらに、異分野融合型の新領域教育研究を取り入れたアグリ創生に関する研究に取り組み、食糧、環境、生命科学の重要課題の解決に寄与します。地域産業界と連携した農畜産物の生産から加工、消費までの総合的な学生参画型の教育研究の展開、起業化を含めた産学官連携による研究開発の推進、地（知）の拠点機能の強化により、地域の農林水産業・食品産業の発展に貢献します。また、生活環境の保全・修復に貢献します。

現在､文部科学省｢地（知）の拠点整備事業｣に｢コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト｣、文部科学省「地域･国際連携による農業版MOT教育プログラム（特別経費)｣、日本学術振興会「我が国の未来を拓く地域の実現に関する調査研究」に「北部九州ニュートラコスメ研究開発拠点形成に関する調査研究」などが採択され、産学官連携による地域の活性化や人材育成に関わる教育研究プロジェクトが進行しています。同窓会の皆様のご支援ご指導をいただきながら教職員一同力を合わせて、地域と共に未来に向けて発展し続ける大学を目指して、生活基盤を支える農学を探求し、教育、研究、社会貢献に取り組んでまいります。本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

佐賀大学農学部・同窓会意見交換会を開催

平成26年12月１日に菱の実会館において、「佐賀大学農学部と同窓会との意見交換会」を開催しました。主な内容は次のとおりです。

１．農学部の現状と今後の取組【農学部渡邉学部長から】

佐賀大学は、法人化して11年になる。平成27年には中期計画の２期が終了し、第３期目に入る節目の年を迎えようとしている。現在、大学の責務や役割を見直し、今後の大学のあり方を定める作業を進めている。

農学部においても、大学が目指す「地域とともに未来へ発展しつづける大学」にそって動いていくことになるが、地方創生が国の重要な施策となっており、地域がその特性を活かして活性化を図ろうとするなかで、大学がどう貢献していくかが重要な課題となっている。

このことは、地域のニーズにあった研究開発が求められると同時に、人材育成で地域の活性化に貢献することが求められている。佐賀県にあるものを活用し、かつ全国に通用するものを作っていく。あるいは全国・世界に通用するような地域リーダーの育成が期待されていると考えている。

このようななかで、現在、アグリ創生教育研究センターが核となったアグリ医療への取組において機能性食品の開発を含めた農の機能性を広く展開する事業、農業を経営としてとらえ、企業的感覚で農業経営や地域を牽引できる経営者の育成を目指した農業版MOT講座の開設、さらに唐津市を中心とした化粧品分野のビジネス環境を産学官により整備するジャパン・コスメティックセンター（JCC）への参画などを行っている。今後も、人材や遺伝資源といった強みを生かし、地域に貢献できる農学部を目指す。

２．同窓会の主な取組について【同窓会川副会長から】

今年は、５つの重点項目を掲げ同窓会活動を進めている。

１つ目は、会員に対する情報提供である年２回の会報の発行、２つ目は、組織強化として昨年から実施している県内各地区在住者の交流会への取組で、神埼地区で第１回目の会を開催したほか、鳥栖・みやき地区は現在お世話をしていただく人を探している。また、有田地区の組織を伊万里市まで広げてもらうよう近いうちに代表者と意見を交換する予定。３つ目は、農学部との意見交換会。この意見交換会は毎年行っているが内容を充実し有意義なものにしていきたい。４つ目に在学生への支援としてキャリアデザイン講座、就職ガイダンスへの卒業生の派遣に加え、今年は初めての試みとして教職員・卒業生との交流会を開催した。在学生からも多様な意見を頂いたので今後もニーズに応えるよう充実していきたい。５つ目は、農業人材育成の面からMOT講座への助成を行う計画である。

３．意見交換

同窓会から農学部への意見要望、あるいは大学から同窓会へ要望などを提案していただき、それぞれについて意見交換を行った。話題は地方創生と大学の役割、佐賀県におけるGAPや６次産業化、来年の農学部60周年記念行事など多岐にわたり、具体的には、大学での地域密着型の研究教育の強化、グローバル化の中でのGAPの必要性と指導者の育成、６次産業化をどう進めていくのか、地方の戦略を立てる上での検討の場づくりと大学の貢献等々、有意義な意見交換会となった。

重富　修（Ｓ59年卒・育種）

同窓会支部結成に向けた動き

農学部同窓会では同窓会組織強化を重要課題として取組むことになりました。現在、同窓会支部には佐賀県内に県庁支部、教職員支部、農協連支部、農業自営者の会、佐賀県支部など５支部、さらに熊本県支部があります。これら支部は全て職域支部であり、属さない多くの会員がおられます。そこで、多くの会員が所属できる地域支部結成が課題となります。本年は、地元佐賀県内で旧神埼郡地区、鳥栖・三養基地区、有田・伊万里地区で地域支部発足に向け、有志の方にお集まり頂き審議致しました。旧神埼地区では代表が決まり、今年３月には第２回目の懇談会が予定されております。有田・伊万里地区でも今年３月までに懇談会を開催予定です。鳥栖・三養基地区では準備が進められている所です。

白武義治（Ｓ51年卒・農経）

在学生と教職員・卒業生の交流会を開催 ～在学生・大学と同窓会との絆を深めるために～

平成26年11月26日就職ガイダンス終了後､｢かささぎホール｣において「在学生と教職員・卒業生の交流会」を開催しました。今回の交流会は、在学生の就職についての希望や不安、悩みに応えるため、就職ガイダンス講師（伊藤ハムウエスト大久保さん、山崎製パン向井さん、九州農政局桑原さん、JA佐賀畠山さん・上村さん）に加え、初めて地域や各職域から幅広い同窓会員も参加するなど在学生と同窓会との絆をより深める機会になりました。

学部の３年生や大学院１年生など在学生約40名、教職員・卒業生約20名の参加をいただきました。

参加した在学生は、おでんやおにぎりをつまみながら、卒業生に質問し、OB・OGの体験談に真剣なまなざしで耳を傾けていました。会が進むにつれて会場の雰囲気も和み、就職活動の話だけでなく、卒業生の職場の実情や、恋愛や結婚の話も出て、みなさん楽しいひと時を過ごしていただきました。

アンケート調査の結果では、参加した在学生は「卒業後の進路」や「就職活動」の悩みが最も多いことがわかりました。今回の交流会について、卒業生に聞きたい話では「就職活動に備えてすべきこと」が多く、次に「就職活動を行った経験」などが寄せられました。参加する卒業生の年齢層については、やはり「自分たちに近い年代」が多かったのですが「幅広い年代」の意見も聞きたいという意向も多くありました。また卒業生の職種については、企業を希望している人が多いのを反映して「企業」という回答が多かったようです。

今回の交流会については、多くの方から「有意義だった」と回答していただきました。同窓会として、これからもこのような機会を積極的につくり、同窓会と在学生・大学との絆を一層深めていく必要があると感じました。

重富　修（Ｓ59年卒・育種）

農業版MOT教育の進展

農学研究科における農業版MOT教育は、平成22年度にスタートし、今年度で５年目を迎えています。本プログラムには、大学院修士課程を対象とした「農業技術経営管理学コース」（２年制）と、社会人を対象とした特別の課程「農業技術経営管理士育成講座」（１年制）の２コースがあり、大学院教育の実質化と国際化を推進するとともに、農業経営や地域農業を革新する人材を育成していくことを目指しています。農業版MOT教育も、これまで受講者や外部評価委員などの意見を踏まえながら教育内容を点検・改善し、プログラムを年々、充実させてきています。ここでは、近年の新しい取組をご紹介いたします。

１　農業版MOT修了生の推移…修了生は60名に

農業版MOTの修了生は､平成26年３月で大学院生23名、社会人37名で総勢60名に達しました。また、平成26年度には、大学院生７名、社会人12名の多彩なメンバーを迎え、賑やかになりました。

MOT４期生の修了祝賀会（H26.3）

２　農業版MOT教育の新たな動き

①新科目の開講と実践者の招聘

平成26年度から受講者のニーズに、より的確に応えるため新科目として、実践マーケティング論、経営者論、６次産業化戦略論、佐賀農業論、アグリ・イノベーション論１・２、農業技術経営管理学概論、農業技術経営管理学特別講義を開講しました。また、新設した経営関連科目については、実践家やMOT修了生など外部講師を積極的に招聘し、現場の動きを踏まえた内容に充実しています。今年度は、本学同窓会員でもある元全農・JAさがの中西義裕氏（佐大農経47卒）をはじめ、MOT １期生の古賀信一郎氏（光樹トマト農家）、２期生の北島慎二氏（北島商店）、東京から農都共生総合研究所の川辺亮氏、大阪JFCの白井永俊氏に貴重な講義をお願いしました。またアグリ・イノベーション論では、農学部の先生方から農業や食品産業等についての革新技術等、最新の情報を講義していただきました。

②ICT活用による教育プログラムの提供

今年度からICTを活用した教育手法としてe-learning化に着手し、「農業技術経営管理学概論」､「アグリ・イノベーション論」の収録に取り組んでいます。

③国際化対応プログラムの強化

韓国農水産大学、忠北大学、農協大学、済州大学および農業経営者課程（Ｃ・Ｅ・Ｏ課程）卒業の農業経営者などとの約一週間の相互交流を引き続き実施するとともに、昨年は東京農業大学オホーツクキャンパスを中心とした北海道研修を新たに実施しました。

韓国農水産大学との研修交流会（H26. 8）

④農業版MOT修了生の成果発表と国際シンポジウムの開催

平成26年７月18日に「６次産業化と地域活性化」をテーマに農学部で特別講演会を開催、東京農業大学の黒瀧秀久教授が基調講演、MOT修了生の野村勝浩氏、山下益徳氏、小川光氏、本山智子氏の４名が修了後の取組成果を報告。

農業者、食品関連企業、行政、農協関係など200人が参加し、活発な論議が展開されました。また、農業版MOTの女性教育シンポを初めて開催するとともに韓国農水産大学、忠北大学、農協大学と農業人材育成や農業政策の最新動向についての国際シンポも開催してきています。

３　MOT修了生の活躍

①新商品の開発・販売が進展

平成24年には古賀信一郎氏（１期生）と西村洋介氏（２期生）による「光樹トマトジュース」の商品化をはじめ、平成25年度には北島慎二氏（２期生）が「しょうが飴玉」、

公開シンポジウム「６次産業化と地域活性化」（H26. 7）

平成26年度に「乾燥粉末野菜」（生姜、レンコン、ごぼう、人参など）を、本山智子さん（４期生）は「塩糀、えび麹」を、また、野村勝浩氏（２期生）は、ヤーコン茶を使ったソーダー「九美人」を飲料会社等との連携で開発・販売するなど多様な取組が芽生えています。

②地域での活躍と院生の就職

１期生の成富正司氏「㈱Plant Farm Japan）」が平成25年度全国豆類経営改善共励会の個人経営の部門で「農林水産大臣賞」を受賞、第４期生の高橋裕典さんは、革新的な新事業に取り組む企業を表彰する「九州ニュービジネス大賞」で奨励賞を受賞、その後、味の素㈱「バイオマスリンクin佐賀」としてさらに進展が期待されます。

平成26年３月に修了した大学院生は、田中雄一郎さんが柳川市役所、大久保浩太さんは長崎島原農業改良普及センター、多良宣晃さんはエーザイ生科研、齋藤茜さんは「ふくや」、村山賢さんは鹿児島県農協中央会、後藤健太さんは山口県警、原田克哉さんは佐城農業改良普及センターで活躍中です。

４　おわりに

この農業版MOT教育プログラムの推進に当たっては、文部科学省の平成21 ～ 23年度「組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院GP）」、平成26 ～ 28年度「地域・国際連携による農業版MOT教育プログラム」の事業をベースに、大学、農学研究科並びに農学部同窓会に多大な御支援・御協力を頂いており、また、「農業版MOT教育推進協議会」や「佐賀大学農学部アグリ・マイスターの会」（農業版MOT同窓会）など多くの外部関係機関に支えられながらプログラムを推進しており、厚くお礼を申し上げます。今後、本プログラムをさらに充実させ大学の社会貢献に一層、努めていきたいと考えています。

農学研究科特任教授　内海修一（Ｓ49年修了・大学院）

佐賀大学農学部教授・准教授人事異動（平成26年４月１日現在）

	講　座　名	新	氏　名	旧	発令日
1	応用生物科学科 生物資源開発学講座	教　授	一色　司郎	(准教授)	H23.4.1付け
2	〃	准教授	山中　賢一	(採　用)	〃
3	〃	教　授	穴井　豊昭	(准教授)	H25.6.1付け
4	〃	准教授	古藤田信博	(採　用)	H25.7.1付け
5	〃	教　授	鄭　　紹輝	(准教授)	H26.4.1付け
6	応用生物科学科 生物資源制御学講座	准教授	徳田　　誠	(採　用)	H23.10.1付け
7	生物環境科学科 生物環境保全学講座	准教授	郡山　益実	(助　教)	H24.5.1付け
8	〃	教　授	近藤　文義	(准教授)	H25.4.1付け
9	〃	准教授	弓削こずえ	(採　用)	H25.10.1付け
10	〃	准教授	上野　大介	(講　師)	H25.12.1付け

	講　座　名	新	氏　名	旧	発令日
11	生物環境科学科 資源循環生産学講座	教　授	廣間　達夫	(採　用)	H23.4.1付け
12	〃	教　授	染谷　　孝	(准教授)	H24.10.1付け
13	〃	教　授	鈴木　章弘	(准教授)	H25.4.1付け
14	〃	教　授	田中　宗浩	(准教授)	H26.3.1付け
15	生命機能科学科 生命化学講座	准教授	宗　　伸明	(採　用)	H23.4.1付け
16	〃	教　授	小林　元太	(准教授)	H25.10.1付け
17	生命機能科学科 食糧科学講座	教　授	濱　洋一郎	(准教授)	H24.11.1付け
18	〃	准教授	光武　　進	(採　用)	H25.9.1付け
19	〃	教　授	永尾　晃治	(准教授)	H26.3.1付け
20	附属アグリ創生 教育研究センター	教　授	駒井　史訓	(准教授)	H25.7.1付け
21	〃	准教授	江原　史雄	(非常勤博士研究員)	H26.4.1付け

農学部研究室紹介 その⑩

応用生物科学科　動物行動生態学研究室

担当教授：野間口　眞太郎

動物行動生態学研究室は、文字通り動物が置かれた生態の中でどのように行動し、その行動が動物にとって機能的、進化的にどのような意味を持っているかを調べる研究を行っています。研究活動としては、生物学的に重要な知見を得ると同時に、その知見から害虫などの動物の制御や環境保全などに役立つ基礎情報の集積、それらを元にした応用面での提言なども行っています。具体的には、身近な環境に生息する昆虫や魚類の子育て行動に注目し、その稀な行動がなぜどのように進化したのかを調べています。また、群れを作る魚類の個体間相互作用において、個体の役割や個体の性格がどのように関係するのかも調べています。行動データの解析法の開発も研究テーマの１つです。さらに応用的な活動としては、地元行政の環境アセスメント事業の評価や、環境保全・生物多様性維持に関わる事業計画の評価作業、また環境教育事業に協力しています。

現在の研究室のメンバーは、教授１人、４年生５人、３年生４人とこぢんまりとしていますが、少数精鋭で頑張っています。教授の野間口は九州大学理学部で生態学を学び、1993年以降、佐賀大学教養部で生物学の講義を担当していましたが、1996年に農学部に移籍し、現在の所属に至っています。

最近のうれしいニュースの１つは、昨年度３月に博士課程を修了した本研究室の向井裕美さんが育志賞を受賞したことです。「日本学術振興会育志賞」は天皇御下賜金で創設され、毎年10名余り

権威ある育志賞受賞

諫早市出身　向井裕美さん

カメムシの母の子育て　震えて育てる母の姿！

▲受賞報告の模様

▲育志賞を受賞した向井裕美さん

振興会育志賞授賞

カメムシの子育ての謎を研究する諫早出身で鹿児島大学の向井裕美（ゆみ）さんが、今年度の日本学術振興会の育志賞を受賞し、3月11日、宮本明雄市長を訪れ、受賞報告を行いました。「母系女子」の誕生です。

この賞は日本学術振興会が将来、日本の学術研究の発展への貢献が期待される、大学院博士課程在籍の優秀な学生に贈られています。25年度は向井さんをはじめ、東大、京大、阪大など18名が受賞しました。

佐賀大農学部に博士課程が無いため、向井さんは鹿児島大学大学院連合農学研究科に籍を置いています。

研究課題は「社会性カメムシ類における親・胚間の相互作用とそのコミュニケーション機構の研究」。カメムシの親が子を孵化するため、10分位の間、小刻みに震えて孵化を始める事に、着目。なぜ、そのようなことをカメムシの母はするのか？の研究が評価されたものです。

受賞者には、同振興会から奨励金○○万円が受賞者に贈られたそうです。

向井さんは、この4月から、茨城県つくば市の森林総合研究所で研究員として内定。今後は、カメムシのほか、様々な虫のコミュニケーション方法を研究したいと、抱負を語っていました。

向井裕美さんが育志賞受賞

の優秀な博士大学院生に贈られるものです。2013年度は向井さんをはじめ東大、京大などの18名が受賞しました。

もう１つの最近の研究室のニュースとして、昨年７月に米国ニューヨーク市立大学のハンター校で開催された国際行動生態学会において「昆虫類とクモ類の亜社会性」というタイトルで、シンポジウムを開いたことも取り上げたいと思います。オーガナイザーは当研究室の教授である野間口と佐大農学部応用動物出身のFilippi博士です。発表者として、上記の向井裕美さんを始め世界中から昆虫やクモの亜社会性を研究している著名な研究者の方々に集まってもらいました。今後の研究の方向性を見据えられる非常に有意義な議論が行われ、成功裏にシンポジウムを終了できました。

研究の発展、教育への工夫、学生個人への研究指導、社会貢献における課題は山積みですが、今後も国際化への意識を失わずに鋭意努力していきたいと考えています。

2013年度研究室メンバー

国際シンポジウム発表者

村田 晃 先生の瑞宝中綬章受章祝賀会が開催されました

平成26年度春の叙勲で佐賀大学農学部名誉教授 村田晃先生が瑞宝中綬章受章され、平成26年８月２日㈯、グランデはがくれにて醗酵生産学・応用微生物学・微生物機能学同門会主催で祝賀会を開催しました。会場には渡邉啓一学部長をはじめ、OBの先生として内田泰先生、加藤富民雄先生、現役の先生では神田康三先生、光富勝先生、上田敏久先生、小林元太先生にもご出席いただきました。同門会の出席は、最も先輩の昭和44年度卒業の安部信一さん他４名から若い平成12年度卒業の本村貴子さんまで、そして留学生で大学院生だった金容洵はご夫妻で出席されるなど、50余名でお祝いをしました。華やいだなかにも、手作りの感のある心暖まる祝賀会でした。

荒木清史（Ｓ54年卒・醗酵）

柳田 晃良 先生　佐伯賞を受賞

柳田晃良先生（前生命機能化学科教授、現西九州大学健康栄養学部長）が公益社団法人日本栄養・食糧学会の2014年度功労賞（佐伯賞）を受賞。受賞は「食品成分によるメタボリックシンドローム予防に関する研究」に対する業績や同学会副会長等などの学会活動に関する活動が認められたものです。なお、同教授は2006年に同学会学会賞を受賞されています。

大久保　惇（Ｓ47年卒・土肥）

10年ぶりの農経会の開催

平成26年11月１日、佐賀市の四季彩ホテル千代田館で、約10年ぶりに「農経会」を盛大に開催しました。昭和34年卒業の先輩から平成26年卒業生まで、60名が参加。発起人代表の江口正則氏（Ｓ35年卒）の挨拶、続いて物故者（故百武定弘氏：Ｓ28年卒、故藤田静生氏：Ｓ33年卒）への追悼を捧げ、白武義治教授から農業経済学教室の組織変遷と研究動向の紹介を受け、卒業年代グループ別に近況を報告。

Tsilaroさん夫妻

長年、農業･農村の振興に頑張ってこられた年配層のパワーに圧倒されつつも、各年代グループが、それぞれの分野で元気に活躍している様子が数多く報告されました。元気で酒をたしなみながらも家庭菜園や趣味の農業、仲間づくりなど多くの卒業生の方が「農」との繋がりを大切にしながら人生を楽しまれているのが印象的でした。

懇親会では、故伊東勇夫先生から寄贈された緑の「農経旗」のもとに年代を超え懐かしい話で盛り上がり旧交を温めました。当日は愛知、大阪、徳島など遠方からの参加に加え留学生夫婦（アジア経済研究所）も千葉から参加するなど国際交流も広がりました。今後も「農経会」を継続的に開催していくことを決め散会し、バルーン大会でライトアップされた佐賀の街を満喫しました。

福岡県農政連事務局長：今岡靖弘（Ｓ53年修了・大学院）

職場では、佐賀県農業系高校の取組（その２）

佐賀農業高校における動物セラピー活動

１　はじめに

現在、わが国は国民の４人に１人が65歳以上という超高齢化社会を迎えており、今後も早いスピードで高齢者人口が増加し、2050年には３人に１人が65歳以上になることが推計されています。このように、地域社会の機能や世帯構造が大きく変化する中にあって、高齢者福祉のあり方が大きな課題となっています。

一方で核家族や子育て中の親の孤立等で不安や負担感から出産や育児を敬遠する傾向が強くなっています。これらが原因のひとつと考えられる少子化により児童・生徒数が減り、学校も一部の地域を除いて統廃合や学級減が進んでいます。特別支援学校や、通常の小・中学校に置かれている特別支援学級の数は年々増え続けていることが、文部科学省の学校基本調査でも知ることができます。

本校が位置する白石町においてもこれらの問題は決して例外ではありません。そこで、農業高校の強みを活かした福祉活動を展開し、地域貢献ができないだろうかと検討を始めました。

２　動物セラピー部による福祉貢献活動の取り組み

まず､本校が約15年前より取り組んでいる｢ポニー乗馬体験及び小動物とのふれあい活動｣という、地域住民の認知度も高い動物の癒しを活用した支援をヒントに、平成23年度、動物セラピー部を部活動として立ち上げ、福祉動物を活用した動物介在活動を地域貢献につなげることにしました。

活動は、農業科学科の科目「生物活用」等の動物関連科目を中心とした学習活動及び課外活動をとおして行うこととし、近隣の小学校だけでなく、やや離れた佐賀市へもポニーを運搬し県のイベントと合わせて｢移動動物園｣として乗馬体験を実施しました。このように数多くの方々に動物との触れあいの場を提供するとともに特別支援学校との交流など、活動の場を広げようと現在も継続しています。

また、平成23年10月には２匹のトイプードルを導入し、医療機関や高齢者施設などで人々と喜怒哀楽を共有し心と身体を癒す動物「セラピーアニマル」として育成を始めました。平成24年２月には更に３匹が誕生し、平成25年度より５匹での活動を行えるようになったことから、老人福祉施設に出向いての福祉支援も行えるようになり、活動の幅が広がりました。

生徒達は、毎日早朝及び夕方の飼育に一生懸命汗を流しています。その他、授業においても交流活動する際、動物や福祉の両面の専門知識が重要であることから定期的に専門家からしつけの注意点やトリミング等のケアのコツ、福祉や繁殖等について教わりながら専門的な知識を少しずつではありますが確実に深めています。また、平成25年には九州初となる本校独自の資格であるトリマーライセンスを設け３名の生徒が合格し、日常管理でその技術を発揮しています。

３　生徒への学習効果

ボランティア活動や動物介在活動の実践において、コミュニケーション能力は重要です。ですが、以前実施したアンケートにおいて、交流活動を希望する生徒の中にもコミュニケーションをとることが苦手な生徒が25％程度いることが分かりました。そこで移動動物園を実施した際の来場者アンケートで「乗

馬中に高校生からの積極的な声掛けをしてもらえば子供の緊張がほぐれると思う。」や「待機時間などに絵や写真を見せて説明してもらえば更に興味がわく。」といった意見も多かったことから、授業及び動物介在活動を展開していく上で、生徒が積極的に参加者と関わる姿勢やこれまでの学びや思いを的確に伝える方法を考えさせ、言語活動に重点を置いた交流の改善に取り組み、再度参加者アンケートを行うことにしました。その結果「動物に触れ合う機会がないので子供も不安がっていたが高校生が注意点を分かりやすく事前に説明してくれたのでとても良かった。」や「初めての乗馬体験だったが、高校生が明るく親切で子供がとても喜んでいた。」などの感想をいただきました。同時に生徒の意識も向上し、「参加者といろんな話ができ、説明も熱心に聞いてもらえてうれしかった。楽しんでもらうためにはコミュニケーションが大切だということが分かった。」や「最初は不安だったが、終わってみると自信になった。」という心境の変化も見られ、コミュニケーション能力向上の契機とする手応えを感じました。

動物介在活動の目的は、クライアントの心身の回復はもちろんですが、セラピスト側となる生徒の動物を愛する心を育て、豊かな情操を養うとともに、世代間などの多様なコミュニケーション能力の育成を図ることがあります。「小学生にきちんと説明することは難しかったが喜んでもらえてうれしかった。」や「子供たちの大きな声で動物が暴れそうになったが、対応できる準備をしておいたので良かった。」等の意見から、事故を未然に防ぐため、動物調教訓練の知識を身につけることの重要性を理解して実践することができるようになったことが感じとれました。この時、生徒の学習効果を高めるためにはこのような専門性を活かした様々な体験型学習活動が有効であることを再確認することができました。

2014年（平成26年）7月29日（火曜日）佐賀新聞

佐農高 動物セラピー部が講座

小動物やさしく接して

いろいろな人に動物と触れ合う機会を提供している佐賀農業高「動物セラピー部」が26日、嬉野市のうれしの特別支援学校を訪れた。部員9人が、トイプードル4匹とウサギ4匹を持ち込み、子どもたちが動物との触れ合いを楽しんだ。

嬉野市 白石町

うれしの特別支援学校

子どもたち触れ合い

同校で行われた、障害のある子どもたちへの支援を広げる「ボランティア養成講座」の一環。部員らは「動物に大声は出さないで」「やさしくお尻から持ってあげると安心する」と、動物に触れる際のポイントを説明。「抱っこして」「なでてあげて」と子どもたちをいざなった。

初めは恐る恐る触っていた子どもたちも、動物たちを抱くと「かわいい」「フワフワしてる」とうれしそう。佐賀農高2年の村上麗季さん（16）は「ウサギを抱いた男の子は、ウサギのことをたくさん質問したり、逃げないか心配したりして、障害はあっても他の子と変わらないと親しみを感じた」と笑顔だった。

同部は、これまでにも土、日曜や放課後に、幼稚園や保育園、高齢者福祉施設、イベント会場などでボランティアを実施。障害者を対象としたボランティアも考えていたところ、本講座への声がかかり実現した。

講座には、ボランティアに関心を持つ他校の学生や一般の人など約30人も参加。ダンスやミニゲームなどを子どもたちと一緒に体験し、障害への理解を深めた。（志垣直哉）

トイプードルとの触れ合いを楽しむ子どもたち＝嬉野市のうれしの特別支援学校

4　まとめ

動物セラピー部の活動をとおして、地域の保育施設・小学校・高齢者福祉施設・幼い子供がいる家族等多くの対象者と交流会を行って来ました。さらに、平成26年度には初めて特別支援学校訪問や放課後デイサービスでの動物介在活動を行うことができました。多くの方に喜ばれ、生徒達も新たな活動の場を与えていただき更に積極的な姿勢が見られるようになりました。

今後も交流活動を継続することにより地域との信頼関係を築きながら、コミュニティの場を提供し、支援を必要とする方々と寄り添いながら活動することで、動物セラピー部の活動のあり方を更に良い方向へ発展させ、地域貢献につなげていきたいと考えます。

佐賀農業高等学校　教諭　嘉村陽一郎
（H12年卒・植病）

支部だより

佐賀県支部　佐賀県支部総会・懇親会

佐賀県支部は県内在住で佐賀大学農学部同窓会のいずれの支部にも所属しない人をもって設立され、平成20年２月発足以来６ヶ年が経過し、現在会員数は105名となっております。

支部組織の強化、活性化を図るために全会員に年賀状の発送や会員相互の親睦の場として総会及び懇親会を実施しており、その参加者も年々増加し、24年度の21名から今年度（26年度）は33名の出席となりました。（平成26年５月９日開催）

特に今回は牟田副知事さんも会員として出席され、また、初めて女性の参加を仰ぎ、懇親会では酒を酌みかわしながら情報交換や学生歌をうたったりの、しばし楽しいひと時を過ごすことが出来ました。

ただ、出席者の大半を県職員の退職者が占めておりますが、これは会員数に占める割合からすると止むをえないことかと思います。

しかし、会員数の増加については、現時点では県職員を退職された方は必然的に会員になっていただいておりますが、他の職場での退職者の皆さん方についても是非会員になっていただきたいと考えており、役員一同ご相談に伺いたいと考えております。

その節はよろしくお願いします。

佐賀県支部長　大久保清海（Ｓ41年卒・園芸）

佐賀県庁支部　佐賀県庁支部通常総会

平成26年９月３日にグランデはがくれ（佐賀市天神２丁目）において、平成26年度佐賀大学農学部同窓会佐賀県庁支部通常総会を開催しました。

平成26年度は、森山尚純、梅崎千晴、高山剛、御領原雄太の４名が新たに会員になられました。その結果、現在の会員数は224名となっています。

総会には会員37名の参加があり、佐賀大学農学部同窓会からは川副会長、光富理事のお二人も駆けつけていただきました。

議事では、滞りなくすべての議案について、承認をいただきました。

新しい支部長以下の役員については、次のとおり選出されました。２年間、頑張っていきたいと思います。

支部長：田代暢哉（Ｓ54）、副支部長：高尾雅晴（Ｓ57）、船津哲也（Ｓ56）、幹事長：妹脊　浩（Ｓ59）、会計：森　隆幸（Ｈ３）

幹事：明石真幸（H18）、岩城雄飛（H17）、池田英彰（H16）、森　則子（H14）、長　義彦（Ｈ６）、瀬戸和善（Ｈ２）、永松沙哉（H14）

監事：安西　隆（Ｓ55）、吉松修司（Ｓ58）

〈（　）は卒業年次、新役員をゴシック体で記載〉

総会後の懇親会では、楽しみにしていた毎回恒例となっている「くじ引き抽選会」もあり、時間を忘れる程に先輩・同輩・後輩と和気あいあいと懇談を楽しむことができました。同窓会の魅力、ここにありです。

今年３月に開催される「先輩を送る会」には、多くの会員の皆様が参加していただけることを期待しています。　　妹脊　浩（Ｓ59年卒・育種）

熊本県庁支部　熊本県庁支部総会

佐賀大学農学部同窓会熊本県庁支部の平成26年度総会及び懇親会を、平成26年７月25日㈮午後７時より「熊本交通センターホテル」で開催しました。

総会には会員26名のほか、佐賀大学農学部同窓会本部から川副操会長、白武副会長及び有馬理事に駆けつけていただき、また、熊本県庁楠葉会、農業高校同窓会、JA関係同窓会からも出席をいただき、総数32名の出席者数となりました。

総会では、高松会長の挨拶、会計報告後、役員改選があり、新会長に小牧孝一（Ｓ54年卒・応動）、副会長に山中孝一氏（Ｓ54年卒・応動）、監事に永井典昭氏（Ｓ54年卒･育種）､事務局に坂本豊房氏（Ｈ10年卒・細胞）が選出されました。

総会後は懇親会に移り、昨年３月末に退職された立場氏の激励会及び久しぶりに佐大農学部から本県に新規採用された田中一成君（Ｈ25年卒・土壌微生物）の歓迎も併せて開宴しました。さらに、本田祐貴君（Ｈ25年卒・植物ウイルス）の平成26年度熊本県職員採用三次試験合格を皆で祈念しながら（そのご利益があって見事合格）大いに会員相互の懇親を深めました。

現役会員数が減少する中で、新たな会員が増えることは大変喜ばしいことであり、次年度以降も在学生の皆さんには先輩に続いていって欲しいものです。

小牧孝一（Ｓ54年卒・応動）

佐賀市役所支部　佐賀市役所支部の総会・懇親会

佐賀市役所支部は、平成26年８月８日に佐賀市の「グランデはがくれ」で総会を開催し、会員118名のうち49名が参加しました。

総会では会則の改正と役員改選を行い、支部長に西川末実社会教育部長（経済卒）、副支部長に豊田英二保健福祉部副部長（農学部Ｓ54年卒・作物学）が選出・承認されました。

その後、懇親会に切り替え、来賓として佛淵孝夫学長、全学同窓会の金丸安隆会長をはじめ多くの方々にご出席いただきました。

御厨同窓会顧問挨拶

懇親会では西川末実支部長、来賓の佛淵学長と金丸会長の後、顧問の御厨副市長の乾杯で祝宴をスタートし楽しいひとときを過ごしました。また祝宴の最後には豊田副支部長の巻頭言で大いに盛り上がり、大坪博文副支部長（理工卒）の万歳三唱で閉会しました。

なお、佐賀市役所支部は長年休止状態になっていたことから今後は定期的に活動を行うことで、会員相互の親睦を深めていくことになりました。

福田喜隆（Ｓ63年卒・土改）

懇親会状況

佐賀県教職員支部　佐賀県教職員支部総会

平成26年度の佐賀県教職員支部総会・懇親会を平成26年11月22日㈯、佐賀市の「第一三吉丸」にて開催しました。

当日は来賓として農学部同窓会会長の川副　操様と平成23・24年度に佐賀県教職員支部長を務められた水田和彦様をお迎えし、会員の参加は24名を数えました。開会後、荒木清史支部長からの挨拶では、母校に寄せる想いや今後の農学部に期待することを熱く語っていただき、川副会長からは農学部同窓会の近況を交えながらご挨拶頂きました。

議事では、事業報告、会計報告並びに監査報告そして支部役員が承認されました。支部役員は以下のとおりです。

支部長：荒木清史　副支部長：馬場知之、大坪正幸　幹事長：外戸口良文　幹事：谷水淳一、江口秀孝　会計：江原高志　監査：松元公司、小池由恵

総会後の懇親会も終始和やかな雰囲気の中で行なうことができ、同窓生の結束を確認し合うと共に親交を深めることができました。これまで農業高校に勤務する同窓生を中心に開催してきましたが、理科の教員として活躍する同窓生も増えてきたことから、さらに裾野を広げた支部となるよう努めていきたいと思います。

古川稔之（H17年卒・植ウ）

「北海道をめぐる自転車一人旅」　古川　辰馬（S40年卒・育種）

平成26年６月、自転車で北海道を一周した。４年前に始めた「自転車による日本列島北上の旅」は、昨年ついに北海道に達し、念願の最北の地、宗谷岬に立つことができた。昨年の６月の北海道は、雨の日が多く、天候には恵まれなかったが、トラブルもなく、至る所で出会いがあり、北海道でしか見られないような風景にも数多く接することができた。そして何より、４年前の夢が実現できたことに自分でも驚き、喜んでいる。

1　コース（右図参照）

2　旅の概要

○旅に要した日数は14日間、悪天候にもかかわらず、おおむね予定通り走ることができた(総走行距離：1,560km)。

○宿は、都市ではビジネスホテル、地方では旅館、民宿に泊まった。宿には前日までに予約を入れるよう心掛けたが、満室で断られることもあった。釧路ではホテル、旅館で断られ、やっと民宿の１室４人（２段ベッド２つ）の部屋を見つけることができた。

○北海道の道路は、平たん地では路側帯が広く走りやすかったが、海岸線の道路は、アップダウンが多い、海からの風が強い、霧が発生しやすいなどの困難があった。

○北海道ではさまざまな旅人と出会った。バイクで、自転車で、あるいは歩いて旅をしている。沖縄から稚内まで歩く途中だという人にも出会った。こんなすごい人たちと言葉を交わした後は、決まって力がみなぎってきた。

○20km以上走っても人家がない、地平線まで続く麦畑、道端にシカやキツネが現れるなど、九州では想像もできない体験ができた。

3　印象に残った場所など

オロロンライン　留萌から北上する国道232号線（通称、オロロンライン）、左は日本海。羽幌に着くまでこのような景色が延々と続いた。

宗谷岬　北海道最北地の宗谷岬。稚内から約30㎞、向かい風に悩まされた。

黄金道路　黄金を敷き詰めるほど金がかかったためこう呼ばれている。覆道とトンネルが延々と続いていた。

襟裳岬の先端　「風はひゅるひゅる、波はざんぶりこ」の歌いだしで始まる島倉千代子の「襟裳岬」、岬の上はまさにこの歌の通りだった。

日高地方の昆布　久しぶりの晴れ間に、昆布の日干し作業が行われていた。昆布は船に乗って沖合でとる「取り昆布」（７月解禁）と岸に打ち上げられた昆布を拾う「拾い昆布」がある。一日で干しあげなければ質が落ちるので、家族総出で作業していた。

新冠・競走馬の親子　新冠町の「サラブレッド銀座」は７㎞にわたり、道路の両側に競走馬の育成牧場が続いている。春が競走馬の出産シーズンで、今は生まれて２か月くらいの仔馬が母馬と草を食んでいた。

網走市の隣、小清水原生花園で見かけた花、左からハマナス、エゾスカシユリ、エゾキスゲ

編集後記

謹んで新年のお祝いを申し上げます。旧年中は同窓生の皆様には、一方ならぬご厚情を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本号では、今期の同窓会の重点活動項目であります「佐賀大学農学部・同窓会意見交換会」、「在学生と教職員・卒業生の交流会」を中心に取材しました。また、同窓会活動の「見える化」を図ることにも力を注ぎました。

農学部は今年設置60周年を迎えます。会報「ありあけ」を通して、同窓生、在校生及び学校教職員の絆をよりいっそう深めることができるようにしていきたいと思います。今回から新たに編集を担当させていただきましたが、関係者の皆様方にご協力いただきましたことを感謝申し上げます。

本年も皆様方にとりまして良い年でありますようお祈りいたしますと共に、同窓会誌への投稿をお待ちしております。

編集担当：大久保　惇（Ｓ47年卒・土肥）